別れ

高津区支部　中村　志げ子（妻）
戦没者　中村　太郎
戦没地　旧満州

私達親子は引揚です。主人は満鉄社員でした。結婚の為昭和十五年内地に帰って来ました。翌昭和十六年の一月には二人で満州に渡りました。久し振りに帰国した一人息子との語らいも喜びも束の間で、此の日が両親との一生の別れとなりました。

私はまだ若かったので、両親の淋しさ悲しさを思いやる事が出来ませんでした。新潟から船に乗り、着いた処は北満の牡丹江でした。建物は立派ですが、町の風景や人種に目を見張りました。社宅に住みましたが暖房は決まった時間にしか入りません。数ヶ月後赤レンガの新しい社宅に住む事になりましたが、まだ水道も無く暖房はペチカを自分で焚きます。水は満人に運んでもらいました。言葉も分からず「謝謝」有難うがやっとです。

冬になり雪も多く寒さが厳しくなった十一月六日主人が、お産婆（チャムス）さんを呼びに行ってくれ長女が誕生しました。やがて春になり花が咲き始めました。其の後佳木斯に移りました。十八年五月

©2011_財団法人神奈川県遺族会

に流行した肺炎のため長女が病院で亡くなりました。お友達も出来たのに、父の膝の上で絵本を見ていた二人の姿を思い出します。主人は出張中だったので社宅の方々にお世話になりました。

月日も過ぎ十八年七月長男が誕生しました。主人は出張で子供の名前は八紘一宇の中の二字を電報でよこしました。

二十年には錦西県コロ島に移りました。海の見える美しい処です。社宅の前は花や野菜も少し出来る処でした。五月に入り久し振りに主人が帰ってきました。親しくしている堤さん一家と揃って公園に遊びに行き楽しい一時を過ごしました。

然し、家に帰って暫くして思いも掛けず召集令状を受け取りました。今迄の楽しさも一変して立ちすくみました。それまで防空壕に入ったのは一回だけでした。戦争は増々激しくなってきたのです。其夜主人は遺書を書いていました。

最後の日が来ました。当日私は息子を負ぶいコロ島から出る列車から見える所に立って主人を見送りました。主人はきっと車窓から二人の姿を見てくれたと思います。

敗戦が確定し情勢が悪くなり社宅にも敵兵が一軒毎に物色に来るようになりました。我が家にも二人組で一人は銃を向けて入って来ました。私は子供を負ぶっていて「オデュービン」私は病気と云ったら物色だけで出て行きました。社宅の人は全員無事でした。

やがて待ちに待った引揚が始まり、私は長女の位牌を入れたリュックサック一つ背負い、息子は水筒を下げ佐世保港へ無事に帰国しました。下車駅に主人の父が迎えに来てくれました。

昭和二十一年十二月野毛の援護局へ行った時、戦友から「確認の甲」と主人の戦死が届け出し

©2011_財団法人神奈川県遺族会

て有りました。出征からたった三カ月の昭和二十年八月十三日の戦死でした。公報は昭和二十三年十二月に届きました。国の為尊い命を捧げた方々に感謝致しましょう。

©2011_財団法人神奈川県遺族会